赤ちゃんポストについて

熊本市島崎の慈恵病院（蓮田晶一院長）が、さまざまな事情で子育てができない親が新生児を匿名で託す「赤ちゃんポスト」の設置を検討していることが分かった。全国初の取り組みで、同病院はすでに保健所などと協議を進めており「出来るだけ早く設置したい」（徳光正敏・同病院事務部長）としている。

←会見を行う蓮田晶一熊本慈恵会病院院長

厚生労働省によると、捨て子の相談件数は年間 200 件前後とされる。2005 年度の人口妊娠中絶は 28 万 9127 件。また 04 年に虐待でなくなった子ども 58 人のうち、7 人は母親が自治体に妊娠を届けず自宅などで産んで数日後に命を奪われたケースだった。

赤ちゃんポストの歴史は古い。中世ヨーロッパでは修道院などに設けられ、江戸時代にロシアに漂着した日本人を描いた井上靖の小説「おろしや国酔夢譚」には捨て子を入れる引き出しを持つ施設が登場する。現代のポストの“ 先進国 ”はドイツで、慈恵病院も視察し、参考にしている。6 年前に始まり、福祉団体・公私立病院など約８０か所に増えている。イタリアやスイス、ルーマニアにも広がっており、社会に一定の理解を得ていると見るべきだろう。

　同病院によると「ポスト」は既存の病院建物に穴（縦約４５センチ、横約６５センチ）を開け、外から開けられるようにし、内側に「こうのとりのゆりかご」と名づけた箱を取り付ける。箱の内部は保育器と同じ室温３６度に保ち、２４時間受け付ける。赤ちゃんが置かれるとブザーが鳴り、院内の看護師らが駆けつける体制をとる。また、箱の中に赤ちゃんを置いた親らへのメッセージや、子供を引き取りに来る場合の手続きについて記した手紙を入れる。病院は市や児童相談所、県警などに届け、児童福祉法に基づき施設や里親

に引き渡す。新生児の引き取り先としては、岡山県医師会に全国から登録している約 160 組の里親に、行政を通じて紹介する特別養子縁組制度の適用などを検討している。

←熊本慈恵病院

同病院は産婦人科のほか、内科、小児科、外科などの診療科目を持つ総合病院だが、カトリック系で人工妊娠中絶をしていない。命を尊重する取り組みとして、小中高校の性教育に助産師を派遣し、養育が困難な妊婦に養子縁組の仲介もしてきたこうした活動に加えて、昨年から今年にかけ熊本県内で３件の捨て子事件があり、命を落とすケースもあったため、ポスト新設に踏み切る。同病院の蓮田院長は、「捨てられ、失われる命を救いたい。世の中にせっかく生まれてきた命を幸せにはぐくみたいと考えた」と設置の趣旨を説明した。

ただ、一連の乳児受け入れ行為については「置き去り」とみなされ、保護責任者遺棄罪に触れる可能性もある。法務省刑事局、熊本県警ともに「犯罪が成立するかは、個々の事案について判断される」と違法性は個別に検討するとの見解を示しており、ポストは違法と言い切れない微妙な状態に置かれる。また、法務省刑事局は「『赤ちゃんポスト』に置くことが赤ちゃんを保護のない状況に置くことになるかどうかは、具体的な事実関係をみないと分からない」としたうえで「保育器が壊れるなどのケースも想定される。およそ危険がありえないといえるならば（同罪が）適用されない可能性はある」としている。

ドイツの「赤ちゃんポスト」について研究している大阪大の阪本恭子・特任研究員（生命倫理）は「児童虐待などから子どもを守るという設置者側の趣旨は理解でき、基本的には反対する立場にない。ただ、安易な育児放棄につながらないよう、事前のルール作りが必要」と指摘する。

←ドイツの「赤ちゃんポスト」＝02 年ベルリンで

一方、日本大法科大学院の板倉宏教授（刑法）は「子どもをポストに入れた親は間違いなく保護責任者遺棄に問われるだろうし、この制度をこのまま認めれば社会全体に捨て子を容認、奨励することにもつながると思う。病院は親から養育できない理由を聞き出す工夫が必要だ」と話す。これに対し、蓮田院長は「ドイツでは捨て子は増えていない。あくまで緊急避難的な措置だ」と理解を求める。

◇赤ちゃんポスト

病院などが設置した「ポスト」に、養育できない赤ちゃんを親が運び入れる仕組み。内部は暖かく、入れると看護師がすぐに取り出すシステム。ドイツでは００年に取り組みが始まり、０５年現在で７８カ所が存在。その後も増加傾向にあり、ドイツ以外でも設置する国は増えている。だが、ドイツでもいまだに法的な位置付けがあいまいで、設置以後、捨て子が増えたというデータがない一方、保護者による乳児殺害が減ったというデータもなく、評価の是非は難しいという。

◇　特別養子縁組

養子が戸籍上も実親との関係を断ち切り、実子と同じ扱いにした縁組。貧困や捨て子など実親による養育が困難・期待できないなど子の利益とならない場合に、養親が実の親として養子を養育するための制度で 1987 年に新設された。このため、戸籍上は「長男」などの実子と同じ記載がされ、養子であることが分かりにくくなっている。ただし、民法による裁判確定に基づく入籍である旨は記載され、戸籍をさかのぼることで実父母が誰であったか知ることができるようになっており、養子の出自を知る権利や近親婚の防止に配慮してある。

＜こうのとりのゆりかごについて　（熊本慈恵病院ＨＰより）＞

こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）については平成 18 年 12 月に保健所に申請書を提出し、その回答を待っている状況です。

慈恵病院では数年前より中・高校に出向き、性教育の出張講座を行ったり、妊娠に葛藤する女性の電話相談を行っておりました。そのような活動を続けている中、平成 16 年、ドイツに「赤ちゃんポスト」というようなものが設置されていると聞き、視察に行きました。ドイツでは遺棄される新生児の数が毎年 40 人余りに及び、その半数は死後発見されていました。その救済策としてドイツの赤ちゃんポストは未熟な子どもの「生命」を保護するための窮余の一策でした。
日本で妊娠に葛藤する女性のお話を聞く中で、ドイツと同様にどうしても誰にも相談できず、ひとり悩まれている事実に直面し、そしてまた、赤ちゃんの命も絶たれてしまっていることを知り、とても悲しく心が締め付けられる思いをしました。赤ちゃんを預けるという前に相談していただくということが大前提です。相談していただくことがご本人と赤ちゃんの幸せにつながっていきます。
命は尊いものです。私たちはこの尊い赤ちゃんの命だけは救いたい、その一心で“こうのとりのゆりかご”の設置を決めました。
各種メディアにて“赤ちゃんポスト”と報道されておりますが、私たちは“こうのとりが運んでくれた大切な命”という気持ちをこめ、“こうのとりのゆりかご”と名づけております。
報道されてから多くの方に温かいお言葉を頂いており、そのお言葉が私たちの“力”と なっております。感謝の気持ちでいっぱいです。
現在は実現に向け、鋭意努力しているところです。
今後とも、ご支援よろしくお願いいたします。

慈恵病院　理事長　蓮田太二

＜感想＞

　はじめてこのことが報道されたときは、今まで失われてきた命が救われるならぜひ設置してほしい、と単純に考えていた。しかし今回この赤ちゃんポストについてあらためて調べてみて、赤ちゃんポストが設置されるまでにはさまざまな課題や問題・意見があることが分かった。

　まず私はこのポストがヨーロッパを中心に約 80 箇所で実際に設置・運営されていることをはじめて知った。これらの国はキリスト教の国が多い。キリスト教の教えの中で中絶が禁止されているということで、教えが生活や人々の信念の中に深く入り込んでいる国々では赤ちゃんポストの存在意義もあるのではないかと思う。しかし、中絶が絶対に禁止とい

うわけではなく、いかなる宗教にもあまりなじみのない日本で同じことを実践しても、同じようにうまく行くのかということには疑問を感じる。

また、ポストに預けられた赤ちゃんは施設に引き渡し、特別養子縁組制度を適用して里親に養子にだされるということだが、日本では“養子”ということもそれほど多くない。少なくとも私は一度も聞いたことがないし、日本では小説やドラマの中だけの話では？とさえ思っていた。しかし、欧米では養子制度は普通に受け入れられている。実際私もアメリカで、中国などの施設から養子をもらった、という何組もの家庭に出会ったことがある。「子どもにも養子であることは伝えてあるし、アメリカでは養子をもらうことは普通のこと」といわれていた。このような考え方が定着している国と比較してみても、日本で偏見や抵抗感を感じる人が多いのは当然だと思う。

でもやはり、どんな赤ちゃんにも生まれてきた以上、生きる権利はあるはず。赤ちゃんがごみ同然に捨てられ、幼児虐待事件が増加している今、日本でもこのようなポストがあってもいいのでは？と思った。日本と欧米では考え方や信念が異なり、もし設置されたときにどうなるのか想像するのは難しいし、実際に養子をもらうことを考えているカップルが日本にはどのくらいいるのか分からないが、何もしないよりはいいのではないかと思う。

ただこれが悪い方向に動いてしまった場合、どのような対処をしていくのかは具体的に示されていない。たとえば、もしも誘拐された子どもが入れられたとしても警察の捜査の対象にならず判らない。中絶にお金がかかるから…という理由で産んでしまうだけの人が次々と預けるようにならないか？障害を持って生まれてきた子がポストに入れられるのではないか。これらのこと以外にもさまざまな問題は考えられるので、まだまだ慎重に検討を重ねる必要はあると思う。

この熊本慈恵病院では、人工妊娠中絶は扱っていないが、助産師が学校に出向いて性教育の出張講座を行ったり、望まない妊娠に悩む女性の電話相談を行ったりしているそうだ。このような取り組みをすることで、少しでも失われる命を減らしたい、と努力を続けてきたことがよくわかる。しかしこの努力にもかかわらず捨てられた子どもが命を落とすという事件が後を絶たないということで、病院のスタッフたちは無力感を感じ、そのことがこのポスト設置ということにつながったのではと思われた。

できればポストは設置してほしい。そしてこのポストが活躍する日が来ないことを願うばかりだ。